

著者は、がんの相談・自宅への訪問診療・訪問看護（緩和医療）を 24 時間 365 日提供している診療所を開設しています。本書は、その著者自身へも含めて、緩和医療のあるべき姿を問いかけつつ綴った迫力ある内容を記録したものとと言えます。今回は、これまでの在宅緩和医療ケアの現場体験を集大成した著作物と言えます。緩和ケアの基本骨格となるキーワードとして、トータルペイン、全人的ケア、QOL を挙げ、その骨格の基盤が患者の言葉からと提言しています。その上で、その患者の心の声を聞くという姿勢を徹頭徹尾まもる哲理を説いているのです。その論調には、読者に是非とも深く真理にたどりついて欲しいという気概が感じられます。実症例を紹介しながらの記載は、大変分かりやすく、医学生や研修医の若い方々にも、座右の書とすに値すると言えます。また、がん医療のみならず、あらゆる医療の根幹をなすものとして、緩和医療のあるべき提言をしております。したがって、全ての医療者が一読するに値します。

患者個人の今ある世界、さらには、人生という時空間にどのようにして寄り添うように努力したらよいか。本書では、明快に、指針を示唆しています。例えば、STAS( Support Team Assessment Schedule ) と名付けられる緩和ケアの評価ツールを示してあります。緩和医療医・精神腫瘍医のみならず全ての医療者に役立つツールといえます。本書を熟読することにより、認知症患者などの自ら語ることの不可能な患者に寄り添うべく、参照とすべき深淵へと巡るにも、至適な著書と言えます。時あたかも、厚生労働省の研究班において、全国の病院における緩和医療の実態を調査するプロジェクトがなされるとのこと。その際には、本書が参照されることを願う次第です。一方、著者らが以前より訴えている、患者の痛み対策では、米国の科学アカデミー紀要（PNAS）に、「パートナーに手を握ってもらいと、脳が同期して肉体的な痛みが和らぐ」との研究論文が掲載されたようです。したがって、本書がタイトルでも問うている「がんの痛みは必ずとれる」は、近い将来、生命科学的な解明がなされることを期待する次第です

2018年10月 むのはな同窓会 副会長 鈴木 信夫 評